

青森県立高等学校将来構想検討会議第1分科会（第5回）概要

日時：平成27年1月27日（火）

13：30～16：30

場所：青森国際ホテル 孔雀の間

<出席者>

第1分科会委員

丹羽 浩正 分科会長、瀧原 祥夫 分科会副会長、佐井 憲男 委員、
櫻庭 洋一委員、相馬 俊二 委員、高橋 公也 委員、千代谷 均 委員、
斗沢 一雄 委員、南谷 毅 委員
川口 敏彦 専門委員、佐藤 晋也 専門委員、田中 泰宏 専門委員、
遠島 進 専門委員、豊島 隆幸 専門委員、花田 慎 専門委員、
福井 武久 専門委員、山口 龍城 専門委員

1 開会

佐藤理事から、挨拶があった。

2 調査検討

(1) 学校視察について（報告）

事務局から資料1について説明した。

学校視察に参加した委員から次のような所感が述べられた。

- 東青地区では3校を視察した。青森東高校はほとんどの生徒が大学進学を希望しているのに、学力向上が目標になるのはやむを得ないが、できれば他の進学校と同じ特色を持つ学校にはならないで欲しいと思った。その意味では教育方針にある「国家・社会・郷土の進展に寄与する人間」をどのようにして育成しているのかが興味深いところだった。また、生徒4名でじっくり孟子を学ぶ授業を見て、その環境はすばらしいし、うらやましいとも感じた。基礎レベルの高い高校だからこそ、単位制等を生かして、双方向の授業やディベート学習などで積極的に自己主張のできる生徒を育てることにチャレンジしていただきたいと思った。青森東高校は個性的で発信力の高い人財の育成を目指してはいかがだろうか。それが今、社会で求められている人財であり、国際化時代にふさわしい日本人を育てることになると思う。

次に青森工業高校では、生徒が好きなことに真剣かつ楽しそうに取り組んでいる様子が印象的だった。このような学生が日本の技術を支えていくのだろうと思った。ただ、ものづくりが好きなのに、普通高校に進学している生徒も多いのではないだろうか。授業内容と進路をもっと広報して優秀な生徒にもものづくりの道に進んでもらうよう工夫して欲しいと思った。また、青森工業高校には、多くの学科があるので、新たな気づきを得るためにも座学で良いので、学科間の交流を図ってみてはどうだろうか。さらには、民間技術者の力を大いに活用していただ

きたいと思う。民間との連携で言うと、工業高校に限った話ではないが、教員の繁忙に対応する意味からも、地域の力をもっと使って欲しいと思う。元気なシニアに適性のある人は多い。補助的な仕事などは十分できるのではないだろうか。

次に青森東高校平内校舎については、少人数だからできることは多々あると思ったが、居眠りしている生徒も見受けられ心配に思った。在籍状況が地元1に対してその他の市町村が4というのは不自然ではないだろうか。また、他の校舎制導入校では、校歌が学校の環境に合っていないところもあると聞き、少しびっくりした。生徒の自尊感情をいかに高めるかということは、日本の教育における大きな課題だと思う。日・米・中・韓の高校生比較で、「自分に価値がない」とする割合は突出して日本が高いそうで、生徒が自分や学校に誇りを持てるようにする配慮は重要なことだと思う。

次に、下北地区では田名部高校を視察した。下北地区においては会津の気風が教育に残っていると推察されるので、会津流のアイデンティティの確立を下北地区で図ることも個性化の方法になるのではないか。英語科については、英語科ならではの取組に期待する。例えば語学だけではなく、日本の歴史や文化、習慣などをしっかり身に付けさせた上での国際交流を独自に追究する方法もあると思う。同様に下北地域を知り、下北地域に誇りを持った形での国際交流というのもあるべき姿ではないかと思う。

大湊高校川内校舎では、東北高校英語弁論大会2位の実績というのは、小規模校ならではのきめ細かな指導の成果だと感心した。また、生徒が生き生きと授業を受けている印象も受けた。地元の生徒が多く、地域に愛着を持っている生徒が多いことによるものかと想像した。

最後に全体を通して、私自身、40年ぶりに高校の授業に触れ、若かりし頃の日々が思い出され、大変良い経験をさせていただいた。今にして思えば、高校3年間というのは、少し大げさかもしれないが、何物にも代えがたい人生においての貴重な時間だったと思う。そういうことから、生徒が在籍して良かった、楽しかった、あの先生に学んで良かったと思えない高校に、存在意義はないと言っても過言ではないと思う。有意義な3年間、楽しい青春時代を送れるような高校であってほしいと申し上げ所感とする。

- 私は宮崎県の2校を視察した。まず、宮崎西高校だが、宮崎県におけるトップリーダーを育成することを明確に打ち出し、県内一、九州一の進学校を目指すために理数科を導入している併設型中高一貫校である。普通科においても理文クラスを編成するなどして、全体の底上げを図っている。指導に当たっては、現在1桁となっている東大合格者数を、現在の校長が教員として勤務していたときのよう、2桁にすることを目指して、今までの指導法の分析、見直し等を行っている。

併設中学校の生徒の伸びしろがまだあるので、しっかりと指導法を検討する必要があるということや、東大合格者の減少の一因として、県教委が教員を10年以内に異動させるようにしたため、教員の持つ受験指導のノウハウが、若い教員

に伝承されにくくなったということを挙げていた。校長の話の中で、東大等難関大学の合格者数を増やして、宮崎県から官僚を輩出して、彼らに将来を託すために頑張るとおっしゃっていた言葉が非常に印象的だった。将来を見据えての積極的な戦略であると感じた。

次に日南振徳高校は、日南工業高校、日南農林高校及び日南振徳商業高校の3つの高校を統合した学校である。総合選択制により、他学科の学びに関する興味・関心が高まり、他学科での資格取得や、他学科の生徒と共同で課題研究等に取り組んだりしている。電気科の電気工事士の資格を取得した商業科の生徒がいたり、機械科の生徒が農業科の生徒と協力して、バナナの木の鉢の運搬車を製作するなどしていた。校長は、教員が自分の専門だけではなく、他学科の知識・技術も身に付けて、幅広い知識と指導力を持って生徒の指導に当たるなど、総合選択制に対する意識改革がさらに必要だと話していた。また福祉科は、夏休み中の介護施設での実習等が生徒に敬遠されているのか、ここ3年ほど、定員割れを起こしているのが気になった。

総合選択制によるメリットで成果を上げている半面、教員、生徒とも総合選択制に対する意識改革、取り組み姿勢等検討すべき課題も抱えていると感じた。

将来、本県の生徒減少が進んで農・工・商の生徒が減少していった場合、このような学校形態も必要になるのかと考えさせられる視察だった。

(2) 各地区部会での検討結果について（報告）

地区部会委員を兼務する委員から、資料2により各地区部会での検討結果について報告があった。

① 東青地区

- 「1 地区の目指す学校・学科の在り方について」、生徒の幅広いニーズに対応した学科構成、教育制度にして欲しいという意見があった。
- 「2 普通科等について」、現在、単位制を導入しているのは大学等進学希望者の多い高等学校だけだが、生徒の進路希望が多様な高等学校への導入も考えるべきではないかという意見があった。
- 「3 職業教育を主とする専門学科について」、地域社会を牽引していくリーダーになるには、大学等へ進学するコースとスペシャリストを養成するコースを設定するなどして、生徒にどちらかを選択してもらおうような仕組みを作ってはどうかという意見があった。
- 「4 総合学科について」、中学生や保護者の理解度が低いことが課題であるということや、総合学科の取組はとても良いので、もっと増えれば良いと思うという意見があった。
- 「5 定時制・通信制について」、卒業後に立派な社会人になっている姿を見ると、定時制・通信制が果たす役割は非常に大きいという意見があった。
- 「6 多様な教育制度について」、中高一貫教育について検討するに当たっては、何を目的とし、何を求めるのかを明確にしておく必要があるという意見があった。

- 「7 その他」について、意識調査等によると普通科志向が強いようだが、本県の産業動向や高等学校卒業後の進路を考えると、学科の割合は大きく変える必要はないという意見、学科数が多すぎると選択の際に迷ったり、入学後の方向転換が難しくなるため、学科構成はシンプルにした方が良いという意見が中学校の関係者、PTAの関係者からあった。また、小規模校だからこそできる取組もあり、そのような視点も大切にしたいとの意見があった。

② 西北地区

- 西北地区については、産業構造が農林水産業中心であり、近年、観光資源が開発されてきているものの、その他目立った産業基盤がなく、地域としての雇用力が小さく、高卒就職者の多くが地区外または県外に就職の場を求める傾向が強いということ、また、広大な面積に人口が分散していて、高校は地区内に比較的小規模の高校が点在しており、今後の生徒数減少は、県内で最も大きいという状況を抱えていることを委員全員で確認した。
- 「1 地区の目指す学校・学科の在り方について」、明らかに子どもたちが減っている中であって全ての高等学校を残すということは、5年後には何とかなくても、その後も減少が続くことを考えれば現実的ではないとの意見があった。
- 地区の高校の現状は、普通科、農業科、工業科、総合学科、夜間定時制の学校・学科の構成であって、地域の産業構造には適合しており、各高校、各学科の成果の検証と今後への見極めはしっかり行いながら、現在の構成は維持されていくべきという意見があった。また、全県的な学校の在り方については、修正を加えながらも、事務局がまとめた案に概ね賛成するという意見が多数だった。
- 「2 普通科等について」、五所川原高校の理数科で今年度から普通科とのくくり募集が始まり、良い方向に動いているということが報告され、今後の推移を見極めつつ、在り方の再点検をしていくべきではあるが、その中であって、大学入試制度の変更に際しては、理数科における課題研究等が大きな強みになるのではないかとということも意見としてあった。
- また、「4 総合学科について」も課題研究があるので、同様の強みがあるのではないかとということも話し合われた。
- 「3 職業教育を主とする専門学科について」は、地域の基幹産業としての農林部門を考える時に、後継者育成の役割を担う五所川原農林高校の存在は欠かせないものであり、魅力のある農業教育の在り方を含めて、五所川原農林高校では、すでに改革を進めているものの、地域と連携した持続的な取組が必要ではないかという意見があった。また、五所川原工業高校については、雇用の乏しい西北地区にあって、地域産業を支える大きな役割を果たしているという高い評価があった。
- 「6 多様な教育制度について」は、委員である五所川原市教育長から、かつて市長の構想の中には、併設型中高一貫教育校誘致ということもあったが、

中学生が県下で一番減っていく中であって、例えば2学級80人の生徒を県立中学校で抱えるということが、市町村立中学校に及ぼす影響が大きすぎるのではないかということで、今のところ見送っている状況にあるとの報告があった。

- 「7 その他」では、四方に広く広がっている西北地区の状況と、公共交通機関の弱さも加わり、再編に当たっては、通学への配慮や学生寮の整備なども話題に上っていた。
- さらには、本気で高校を残したいと思うのであれば、子どもたちが必ずこの高校に入学したいと思うくらい魅力的にするという気持ちで、各高校とも取り組んでいかなければならないという意見や、地域も含めて、地元の人が自分の子どもを入学させたいと思わない高校は続いていかないという意見、また、例えば西海岸地区では水産業や観光などに特化した学科やコースというものも考えていく必要があるのではないかという意見があった。
- 生徒減が続く中で、どのような魅力のある学校、地域に必要とされる学校をつくっていくかということについて、多くの時間をかけて話し合われた。

③ 中南地区

- 委員の大多数の意見としては、普通科の削減は、これ以上は避けたいということだった。
- 「1 地区の目指す学校・学科の在り方について」、中南地区は職業教育に関する専門学科の割合が非常に高いということから、「2 普通科等については、「来年度からの岩木高校の募集停止によって、地区では県立の普通高校は、非常に少なくなっている状況にある。弘前市内の普通科の県立高校は、弘前高校、弘前中央高校、弘前南高校の3校になるが、普通科の減少に関して、危機感を募らせている。今後の学校の在り方として、弘前高校は、青森高校、八戸高校と連携をして、弘前地区にある国立大学である弘前大学の医学部医学科進学や、リーダー的な存在となる生徒を育成することを目指すべきではないか。弘前中央高校、弘前南高校にあっては、それぞれの学科を特徴化して、理数教育の拠点校とするなど、普通高校の特色を全面的に出すような学校づくりをしていけば良いのではないか。」という意見があった。
- 「3 職業教育を主とする専門学科について」は、現在、農業、工業、商業の専門高校があるが、柏木農業高校では、マーケティングや経理等がわかり、農業で自立、自営できる人財の育成が必要ではないかという意見があった。
- 工業高校においては、専門分野に関しての高いレベルの指導を行い、さらに大学あるいはほかの高度な専門高校との連携を深めていく機会を多く考えていけば良いのではないかという意見もあった。
- 現在、商業科は、弘前実業高校と黒石商業高校がある。ただ、これから先を考えた場合には、2つの高校の共存は難しいことも考えられるという意見も出された。
- 黒石高校の看護科は、公立高校としては北東北唯一の看護師養成施設であって、この重要性は高いことから、今後の継続をお願いしたいということだった。

- 「5 定時制・通信制について」は、現在、尾上総合高校が3部制となっており、様々な生徒が入学している状況にあるが、女子生徒や色々な障害を抱えている生徒等にとっては、弘前地区から夜間部に通学するとなると、時間的に遅くなるということについて、今後、検討する必要があるのではないかという意見があった。
- 弘前工業高校にも定時制課程があるが、最近、働きながら工業高校に通って技術を身に付けて卒業する生徒は多くはなく、弘前地区の高校に入りたいということで、弘前工業高校の定時制を目指す生徒が多い中、実習を伴う工業高校の在り方について、普通科の併設あるいは普通科への改編を含めて、今後、検討する必要があるのではないかという意見があった。
- 中南地区の強い要望としては、普通科はこれ以上なくしてほしくないというのが、非常に強い意見だった。

④ 上北地区

- 「1 地区の目指す学校・学科の在り方について」、各高校とも、「入れる学校」から「入りたい学校」になるよう特色ある教育活動に取り組んでいるという意見があった。
- 「2 普通科等について」、三本木高校は併設型中高一貫教育により、学力が伸びて、成果を上げているという意見があった。
また、「6 多様な教育制度について」、三本木高校附属中学校ができた時に、成績の良い生徒が附属中学校に行って、上北全体のレベルが下がるのではないかという話があったが、それは全く違って、上北地区の中学生の学力は飛躍的に向上したと感じているという意見が地区の中学校長からあった。
- 「3 職業教育を主とする専門学科について」は、農業、工業などのものづくりは他の学科等と一緒に教育するものではないので、専門高校についてはまとめる必要はないという意見がある一方、うまくまとめると良い教育活動につながることも期待できるのではないかという相反するような意見があった。
- 「4 総合学科について」は、これから生徒数が減少すれば総合学科としての教育活動は、より厳しい状況となるので、見直しを考える必要があるのではないかという意見があった。
- 「5 定時制・通信制について」は、様々な事情を抱えている生徒の受け皿となっているので、今後とも環境づくりなどを色々と考えていく必要があるのではないかの意見があった。
- 「7 その他」として、地域感情からすると学校は無くしたくはないが、魅力のある学校が新しくできれば、地域の人も納得するのではないかという意見や、複数の学科を一緒にした新しい学校をつくり、大規模校と小規模校それぞれの指導のノウハウを共有することで両方のメリットを生かした学校づくりが大事であるという意見があり、新しい学校をつくるということに関しては、色々な意見があった。

⑤ 下北地区

- 「1 地区の目指す学校・学科の在り方について」は、「地域を担う子どもは地域で育てる。」という機運が高まっており、下北地区にも進学に対応した拠点校が必要であり、高校卒業後に下北地区を出たとしても、戻ってきて地域を活性化してくれるような人財を育てることが肝要であるという意見があった。
- 「2 普通科等について」は、近年、普通科であっても英語科と同じような英語力が求められ、授業形態もそれに対応するなどしており、英語科の特色化は難しくなっているという意見があった。
- 「3 職業教育を主とする専門学科について」は、ものづくりの感性を磨くには15～16歳の時期が最適であり、この時期に工業を学ぶ意義は大きく、下北地区にも工業科は必要であるという意見があった。
- 「4 総合学科について」は、望ましい総合学科にするためには、より多くの人、物、予算が必要であるという意見があった。
- 「5 定時制・通信制について」は、定時制の生徒数は増えており、なくてはならないものであるため、専用の教室を確保するなどして学習環境を整備したり、多様な生徒に対応するスクールソーシャルワーカー等を配置したりできないものかという意見があった。
- 「6 多様な教育制度について」は、生徒の多様なニーズに応える観点から、全日制普通科単位制を拡充できないものかという意見と、少子化の中、下北地区での中高一貫教育の実践は難しいのではないかという意見があった。
- 「7 その他」では、小規模校であっても、ICT等を活用して、教育を受ける機会を失うことのないように、下北独自のモデルを作りたいという意見と、高校教育改革を進めるに当たって、これまでの地区説明会に加えて、自治体の長への説明も必要になるという意見があった。

⑥ 三八地区

- 「1 地区の目指す学校・学科の在り方について」は、地区の産業構造を考えると、農業科、工業科、商業科、水産科は、なくてはならない学科であるという意見があった。
- 「2 普通科等について」は、中学生の多くは普通科を希望しており、これからの学校・学科を考える際には、生徒・保護者・地域のニーズを大事にしながらか計画を進めていく必要があるという意見があった。
- 「3 職業教育を主とする専門学科について」は、専門高校が地域の人財育成に積極的に取り組んでいるという意見があった。
- 「5 定時制・通信制について」は、三八地区には八戸市にしかないが、郡部から交通費を相当かけて通学しているという状況も念頭に置く必要があるという意見があった。
- 「6 多様な教育制度について」は、連携型中高一貫教育の田子中学校・田子高校は、生徒数減少により苦しい状況であるという意見があった。学校視察の結果からもそういう感じを受けたという意見だった。

- 「7 その他」の項目では、地域からの意見聴取に当たっては、県教育委員会等の方向性が示されない状態で意見を求めるよりも、ある程度の方向性を示した段階で、意見を伺う方が良いという意見、地域の方々の声を丁寧に聞くということが大事であるという意見、教育、福祉、企業、NPO等、幅広く色々意見を聞くことが大切であるという意見があった。

(3) 学校・学科の在り方について

分科会長から、資料3「学校・学科の在り方について(案)」について事務局が説明した後に、事前に提出された意見をまとめた資料5「第1分科会委員への意見照会結果」に基づいて検討を進めることを確認した。

事務局から資料3「1 学校・学科の在り方に関する基本的な考え方」について説明した。

分科会長から、資料5「第1分科会委員への意見照会結果」のうち、「(1) 加除修正に関する意見」の「高校の存在意義や役割(使命)について触れる必要があるのではないか」という意見については、資料3の1ページ「これからの時代に求められる力の育成」が役割として記載されている部分だと思うが、より具体的に記載した方がよいか、意見を求めた。

委員から次のような意見があった。

- 高校の存在意義や役割は、わかりやすいようで、わかりにくいということがあるのだと思う。普通高校でも専門高校でも、役割がこれだからこれをやらなければならないということが、伝わっていない。学校経営だから校長に任せるということではなく、青森県の高校をどうするか、県の教育をどうするのかということをもっと具体的に明らかにするべきではないかと思う。大学等との接続や社会とつながるということ、保護者にも意識させるということも必要ではないかと思う。
- 高校教育の普遍的な目標があると思う。その中では、豊かな人間性や創造性など、かなり大きなテーマが求められていて、それを前提に、本県として高校教育ではこれを育てるのだということを出していけば良いのではないかと思う。
- 背景の1つ目に書いてあるように、高校進学率が98.6%というのは、高校までは進学することが、世の中の常識になってきているということだと思う。問題なのはその先で、青森県の大学進学率は全国最下位だということをニュースで聞いた。生徒にとっては高校に行くのが当たり前で、その選択が普通科なのか職業教育を主とする専門学科なのかということはあるが、最終的に後悔しないようにするためには、大学へのつながりを高校の選択1回で終わるということではなく、高校に入学してからもチャレンジできるチャンスを与えることが大事だと思う。

報告書のこの部分の目的が、PTAの方々に高校の意義というよりも、既に高

校は中学校の延長という意味合いになっているということを理解してもらうため
にあるとすれば、この高校進学率で十分説明できているのではないかと思う。

この項目については、分科会長に一任することを確認した。

事務局から、資料3「2 全日制課程の方向性」について説明した。

分科会長から、資料5「第1分科会委員への意見照会結果」の中の「普通科等」
について、「(1) 加除修正に関する意見」として「拠点校のイメージがはっきり
つかめていない。取組の成果を他地区の学校へも普及させる先導的な役割を果たし
てもらいたい」、「医学部医学科進学等に重点的に取り組む拠点校に関しては拠点
校以外で学ぶことになる生徒の夢を閉ざす危険性がある」などの意見があったため、
「拠点校」の役割、イメージについて、意見を求めた。

委員から次のような意見があった。

- 「拠点校」の意味がはっきりとわからないので、報告書の中で「拠点校」と記
載しても理解してもらえるかどうか、疑問などところがある。別のわかりやすい表
現の方が良いのではないか。
- 普通科と言えども、単位制など、今ある制度を活用して、特色化を図ることが
必要だということについて、大いに賛成である。例えば医学部医学科進学等に重
点的に取り組む拠点校などをつくることも大賛成であり、今までは医師が足りな
ければ外から来てもらうということばかり考えていたが、そうではなくて、これ
からは、自分たちの地域で育てて行かなければならないと思っている。そのため
には、拠点校だけが医学部医学科に進学するための勉強をするのではなくて、県
内各地の医学部医学科の進学を目指す学校に、その拠点校で培った成果を普及し
てもらおうという意味での拠点校としたい。
- 拠点校というのが、いわゆるスーパーエリート校になるのではないかという懸
念がある。医学部医学科に重点を置く学校というのは、生徒の多様な進路、夢を
叶えるという意味では、反対ではないが、こういう学校をどこにつくるかという
視点が課題だろうと思う。例えば青森高校や八戸高校、弘前高校など、最も医学
部医学科に近い学校を拠点校にするというのであれば、私が述べたような懸念が
生ずると思う。配置の問題は第2分科会の役割なので、ここであまり議論をする
必要はないのだろうけれども、地域の人財は地域で育てるという意見があったが、
例えば、医学部医学科を目指す拠点校を医者が少ない下北地区に設けるなど、地
域の特性を重視する視点で、推し進めていくという考えも必要だと思う。
- 拠点校については、普通高校だけではなくて、農業、工業などの専門高校でも
その在り方を前面に打ち出すべきだと考えている。イメージとしては、費用対効
果という視点で合理的・効率的に教育を進めるモデルになりうる学校である。こ
れまでのような点在する学校配置だと、教育の質を担保する視点から、その機能
が薄くなっていくと感じる。現実には人口が減り、生徒が減ることによって、統廃
合などを視野に入れた時、拠点をつくっていくことが、教育戦略として必要だと

思う。

- 教育委員会に聞きたいが、「拠点校」の使い方は、いわゆるスーパーエリート校をつくるということと、農業と工業などが一緒になるなど複合的な学科を一つの学校とすることの拠点化と、どちらの意味で捉えたらいいのか。
- (事務局) 拠点校という言葉は、日本全国どこでも同じ定義で使われているものではないと考えている。例えば、他県だと進学に関する教育の重点校というような言い方をしている県や、農業教育の拠点校などという形で、県内の1校を拠点として、それ以外の農業高校をリードしていくような形に位置付けている県もある。考え方によって、各県の表現も違い、拠点校の役割もまた違っているというのが実際のところだと思う。従って、農業高校、工業高校については「拠点校」という表現をしたり、普通高校に関しては、例えば「グローバル教育の重点校」や「理数教育の重点校」のような言い方もあるのではないかと思う。
- 教育委員会としての今後の方向性はあるのか。
- (事務局) 今の時点で何か方向性があるというのではなく、この第1分科会での議論を踏まえ、どの程度配置していくべきかなどをこの後の第2分科会での議論を経て、答申としてまとめていただきたいと思う。

この項目については、委員の意見を踏まえて修正することを確認した。

分科会長から、資料5「第1分科会委員への意見照会結果」のうち、「普通科等」について、「(1) 加除修正に関する意見」として「リーダーの育成について、各学科のうち普通科だけリーダー育成を掲げるのは、あたかも学科の格付けをするかのような違和感を覚える」などの意見があったことから、修正の必要性について意見を求めた。

委員から次のような意見があった。

- 普通科の記載からリーダーという言葉をとるのではなく、7ページ以降の職業教育を主とする専門学科の記載について、前段の「スペシャリストや地域産業の担い手」というところで止まっているわけだが、例えばここに、「地域産業を牽引する」などリーダー的な役割を担うという表現を付け加えることで、カバーできるのではないかと思う。
- リーダーというのは、色々な使い方があって、そこに何が付くかで言葉が分かれてくるが、現状として、決して普通科だけではなくて、色々な高校から色々な人財が輩出されて、地域のリーダーや社会のリーダーなどとして活躍しているのだと思う。リーダーというのは、結局、組織機能としての役割であって、専門的能力などとは次元が違い、結果として、普通高校であれ専門高校であれ、多様な人財が育ち、様々なリーダーが育ってくれば良いのではないかと思う。

この項目については、委員の意見を踏まえて、修正することを確認した。

分科会長から、資料5「第1分科会委員への意見照会結果」のうち、「普通科等」の「(2) 学校・学科の在り方の検討に向けた意見」について、付け加えることがないか意見を求めた。

委員から次のような意見があった。

- 「社会を牽引する人財、グローバルリーダー等は、どの程度輩出されているか」という意見について補足すると、よく青森高校、弘前高校、八戸高校の話が出るが、では、いわゆる御三家からどれぐらいの人財が輩出されているかということ、世間が思っているのと、実際に活躍している人財との間で乖離があるのではないかと思う。御三家においてそれにふさわしい教育がされているかどうかということとは、検証されるべきではないか。

分科会長から、資料5「第1分科会委員への意見照会結果」のうち、「職業教育を主とする専門学科」の「(1) 加除修正に関する意見」の「工業科の方向性は、大学等との連携のみならず、企業との連携・協力を推進する必要がある」という意見については、資料3の7ページに職業教育を主とする専門学科全体に関する表現として、「他の学科・学校や地域の産業界などとの一層の連携に努める必要がある」と記載している部分があるが、工業科の部分にも記載した方が良いか、委員に意見を求めた。

委員から次のような意見があった。

- 工業科において、「高度な技術を身に付けた工業技術者や研究者の育成に向け、大学等への進学を目指した工業高校の在り方についても検討するとともに、進路意識や学習意欲の向上等のため、大学等との連携・協力を推進する必要がある。」と、特にここで謳っているので、企業との連携・協力についても謳わなければ不十分かと思った。しかし、全体的なところで、「産業界などとの一層の連携を進める必要がある」と記載があるのであれば、修正は不要だと思う。

分科会長から、資料5「第1分科会委員への意見照会結果」のうち、「総合学科」の「(1) 加除修正に関する意見」として、「「総合学科としての特色を活かした教育活動を行うことが難しい場合は、普通科への改編等を含め検討する必要がある」との記載が唐突な印象を受け、断定的に感じる」との意見があったため、事務局にこの記載の経緯について説明を求めた。

- (事務局) 地区部会の中で、今後、総合学科が小規模になっていった時には、色々と難しい面があるのではないかという御意見と、併せて、総合学科に期待する面が非常に高いので、今後、拡充していくことも考える必要があるのではないかという両面の御意見があり、そのことを踏まえて、今回、この記述を追加した。

分科会長から委員に意見を求めた。

- 総合学科は新しい学科で、制度ができて19年目になる。当時は、普通科が非常に増えて、進路決定を先送りして学習への取組が十分でないような生徒が増え

るなど、目的意識に欠けた学習という課題があったことから、生徒の多様化への対応を目的として創設された。現在、全国には350校ぐらいある。普通科だった学校が総合学科になったケースと、職業に関する専門高校だった学校が総合学科になったケースの2通りある。本県の全日制公立高校では校舎制導入校を含め、5校あるが、七戸高校は複数の職業教育を主とする専門学科が併設されていたものを総合学科にまとめた。それ以外の4校については普通科が主体の高校で、専門学科を併設していた。多くの総合学科高校では、色々な学びを行うことで、生徒が学問への興味を持つなどの成果が出ている。総合学科の存続の可否というのは、設置趣旨に沿った機能を満たしているか否かということが一番大事なのではないかと思う。資料3では「教育活動を行うことが難しい場合には」とあるが、「教育内容の多様化を図ることが難しい状況」ということが、具体的な中身になると思う。

この項目については、委員の意見を踏まえて、修正することを確認した。

事務局から資料3「3 定時制課程の方向性」及び「4 通信制課程の方向性」について説明した。

分科会長から委員に意見を求めた。

委員から次のような意見があった。

- 定時制課程・通信制課程共通のこととして、特別な支援を要する生徒への対応は、喫緊の課題であると思う。また、通信制の後期入学制度を含め、できることはなるべく早く実施して欲しい。

事務局から資料3「5 多様な教育制度の方向性」について説明した。分科会長から併設型中高一貫教育校の新たな設置に関して、意見を求めた。

委員から次のような意見があった。

- 上北地区における三本木高校と同様に、むつ地区には田名部高校、西北地区には五所川原高校という進学で実績を上げている学校がある。このように三市以外の学校にもすごく力のある生徒がいると思う。そのような地域の中学生は経済的に余裕があれば、三市の高校に進学できるかもしれないが、経済的に困窮している家庭の生徒はそうはいかない。そういう生徒にとって、もし地元で青森高校・弘前高校・八戸高校に匹敵するような可能性を持った高校があれば、行きたくなるのではないかと。したがって、生徒数が減少する中で中高一貫教育校をつくるというのは、難しいのかもしれないが、必ずしも2学級でなくても、1学級でつくるという方法もあるのではないかと思う。
- 青森高校、弘前高校、八戸高校から、いわゆる難関大学に平均して2～3名ずつ進学させるのか、それともどこかを強力に強化して、2桁台を目指すのか。同じように、みんなで協力してやろうということだと何も変わらないのではないかと。

という感じを受けている。エリート人財の育成という話題もあったが、青森県として力を入れてやるべきところがあっても良いのではないかと感じている。

事務局から資料3「6 学校・家庭・地域との連携の推進」及び「7 魅力ある高等学校づくりへの取組の推進」について説明した。

分科会長から、資料5「第1分科会委員への意見照会結果」のうち、「6 学校・家庭・地域との連携の推進」の「(1) 加除修正に関する意見」として、「「家庭・地域それぞれの教育機能の充実を図る」とあるが、充実を図る方策を示すことが必要ではないか」という意見があったが、このことについて委員に意見を求めた。

委員から次のような意見があった。

- 「家庭・地域それぞれの教育機能の充実を図る」という記述があるが、学校に対して家庭や地域の教育機能の充実を図るということを要求するのは、大変難しいことだと思う。そういうことを要求するのであれば、その充実を図る方策を示すことが必要ではないかと考えた。他の委員の意見であった「家庭・地域の持つ教育機能の充実を図るため、相互の連携を強化し、一体となって取り組む必要がある」という直し方をするのであればそれで良いと思う。
- 定時制・通信制課程の方向性を見て気になるのは、職業に就きながら学ぶ人は当然良いが、「様々な事情を抱える生徒に広く学びの機会を提供する」という言葉が定時制にも通信制にも出てきている。定時制の課程や通信制の課程を様々な事情を抱える生徒たちが集まる場所にしていないかという疑問を持つ。定時制も通信制も本来の意味は違うはずで、様々な事情を抱える生徒が高校に進学するに当たっては、家庭との関係に真正面から取り組む必要があり、なんらかの形で触れても良いのではないかと感じた。

この項目については、委員の意見を踏まえて、修正することを確認した。

分科会長から、資料5「第1分科会委員への意見照会結果」のうち、「7 魅力ある高等学校づくりへの取組の推進」の「(1) 加除修正に関する意見」として、「「本県の高校生にとって得難い価値をもたらすのかどうか」とあるが、他県の生徒との交流はマイナスもあるにしろ、プラスの方が大きいのではないか。可能なら削除してほしい」という意見があるが、この部分の記載の趣旨は、これまでの会議の中で、全国募集は本県の生徒にとって必要かどうかという視点が重要との意見があったことによるものと説明し、この点について委員に意見を求めた。

- 資料3全体を見ると、それぞれの今後の方向性について、ほとんどの部分に「検討する必要がある」とあり、紋切り型でお役所的だが、こういう表現も致し方ないと思う。ただ気になったのは、「慎重に検討する必要がある」と、この部分だけに「慎重に」という言葉が付いていることである。最初から否定的だと

いう感じを受けた。「本県の高校生にとって得難い価値をもたらすものかどうか、ニーズがあるのか等を踏まえ」とあるが、「全国から生徒を募集する場合は、本県の高校生にとって得難い価値をもたらす学科、ニーズがある学科を検討する必要がある。」など、否定的な言葉を入れずにプラス思考で書いて欲しい。

この項目については、委員の意見を踏まえて、修正することを確認した。

分科会長から、資料5「第1分科会委員への意見照会結果」のうち、「7 魅力ある高等学校づくりへの取組の推進」の「(2) 学校・学科の在り方の検討に向けた意見」として、「各高校は時代が求める教育の推進を意識し、学校改革を進めていく必要がある」との意見について補足を求めた。

委員から次のような意見があった。

- 各校とも魅力ある学校づくりが必要だということには、誰も反対意見はないと思うし、大いに進めていくべきものだと思う。今後、少子化が進むということは、高校は中学生に選ばれる側になったということで、公立高校と言えども積極的に独自の魅力を作り出すという認識が必要だと思う。東京に出張したときに、地下鉄の駅で都立高校の生徒募集のポスターを見たことがある。いかに我が校は魅力的な取組をしているかということ地下鉄の駅に貼っていた。そういったポスターを見て、青森県の公立高校ももっと頑張らなければならないと思ったことがある。

各高校は学力の向上だけではなくて、様々な特色を掲げることができると思う。例えば、「本校は就職率のアップに力を入れている」とか、「地域貢献やボランティアを頑張っている」とか、「語学留学制度がある」とか、各校の特徴を中学生に積極的にアピールしていく必要がある。そういう高校側の努力は中学生の多様な価値観に応えることにつながり、結果として高校選択のミスマッチや中途退学も防げるのではないかと思う。

全国的に見ると、様々な県で特色のある取組、魅力ある学校づくりが進んでいる。各校が独自の特色を全面的に打ち出すことに対して、ぜひ、県教委でバックアップする体制をつくって欲しい。例えば、千葉県では魅力ある高等学校づくり大賞などというのをやっていて、大賞に選ばれた学校の取組は大々的にマスコミを通じて報道されている。京都府でも魅力ある高校づくりを進めている。高校側も努力していかなければならないし、ここはぜひ県教委と一体となって、それぞれの高校の魅力を中学生に発信していくという在り方が必要ではないかと思う。

- (分科会長) これは高校だけではなく、大学、企業も同じだと思うが、どうしても現状維持が一番良いとなりがちになってしまうので、こういう取組に向けた意見は基本中の基本であって大事だと思う。生徒にとってみれば、自分の学校が一番大事なので、ぜひ取り組んでいただきたいと思う。

- 「教員の資質向上と専門的スタッフの配置」の中で、「絶対に必要なことは、

魅力的な教員の採用にある」という意見がある。教員採用試験は非常に狭き門で、たくさんの優秀な学生が受験するのではないかと思う。それでも魅力的な教員が採用できないものなのかと思ったので、参考までにお聞かせ願えればと思う。

- 感じるのは、学校の先生があまりにも忙しく、自己研鑽よりも、部活動など色々な準備に割かれる時間が多すぎて、やりたいことや最初の理念・目標と現実には相当のギャップがあって、落ち込んでしまうのではないかということである。いくらかでも事務的にサポートできる分を極力先生から切り離すための体制をしっかりとつくと、生徒の資質が向上していかないのではないかと心配する。先生が思う存分、能力を発揮するためには、雑務をできるだけ解消するような、教員やスタッフの配置などがあった方が良いのではないか。また、学校は一律に全部同じというわけではないので、様々な職業学科を持つところは余計に裏方も含めて大変だろうと思うので、そういうところを汲んであげるような教育改革も必要ではないかと思う。

→ (事務局) 「教育は人なり」という言葉もあるとおり、先生の魅力が生徒の成長に非常に欠かせないものだと誰もが認識している。教員採用試験により魅力的な人材を見つけようとしているが、委員ご指摘のようなことも現実的にはあると思う。本質的な教育以外の部分に精神的・肉体的に労力が割かれているということ踏まえて、県教育委員会としても少しでも支援できる体制をつくっていききたいと思う。報告書の中にもあるが、一つには地域の方に理解していただいて、ご協力いただきたい。保護者の方や近隣の方にも理解していただいた上で、協力していただくということが必要で、そのために必要なことは、うちの学校はこういうことを目指しているということの情報発信、目標を明確にして魅力を見つけていくということだと思う。今日の議論も踏まえて、現実的な部分は不断の努力として取り組んでいきたいと思う。

分科会長から資料5「第1分科会委員への意見照会結果」のうち、「8 その他」について、委員からの意見を求めた。

委員から次のような意見があった。

- 報告書全体を見ると多少散漫というか、メリハリに欠けるような感じがした。全体に配慮するという報告書の位置付けとしてはやむを得ないと思うが、本県の将来のことを考えると、例えば、農業高校の記述にページを割き、農業高校を核として、工業高校、商業高校、家庭科との連携の中での学校・学科の在り方を構想してみるということも、報告書の中ではあり得るのではないか。例えば八戸市の場合であれば、工業高校を核にして商業や農業を連携させていくような形の構成もあるだろうし、今日の意見にもあったが、青森高校、弘前高校、八戸高校に中学校を併設して特別のエリート校をつくるということの提案があっても良いのではないかと思う。特色のある答申とするためには、少しテーマを絞り込んだものを議論する必要があると思った。

分科会長から、「第1分科会で学校・学科の在り方についての検討ということで、全ての学科を対象に幅広く高校教育について検討してきた。この報告は、今後、第2分科会での学校規模・配置の検討につながり、さらに議論を重ねて、答申となるので、その際には青森県らしさや本県独自の視点が反映された答申となるように検討していきたい。」との発言があった。

また、資料3については、今日の検討を踏まえ、修正内容等を分科会長と分科会副会長で確認し、2月の検討会議に報告することとし、委員にも送付する旨、確認した。

(4) 第2分科会での検討に関連する事項について

事務局から資料4について説明した。

分科会長から委員に意見を求めたが、意見はなく、当該事項についても2月の検討会議に報告することを確認した。

3 閉会